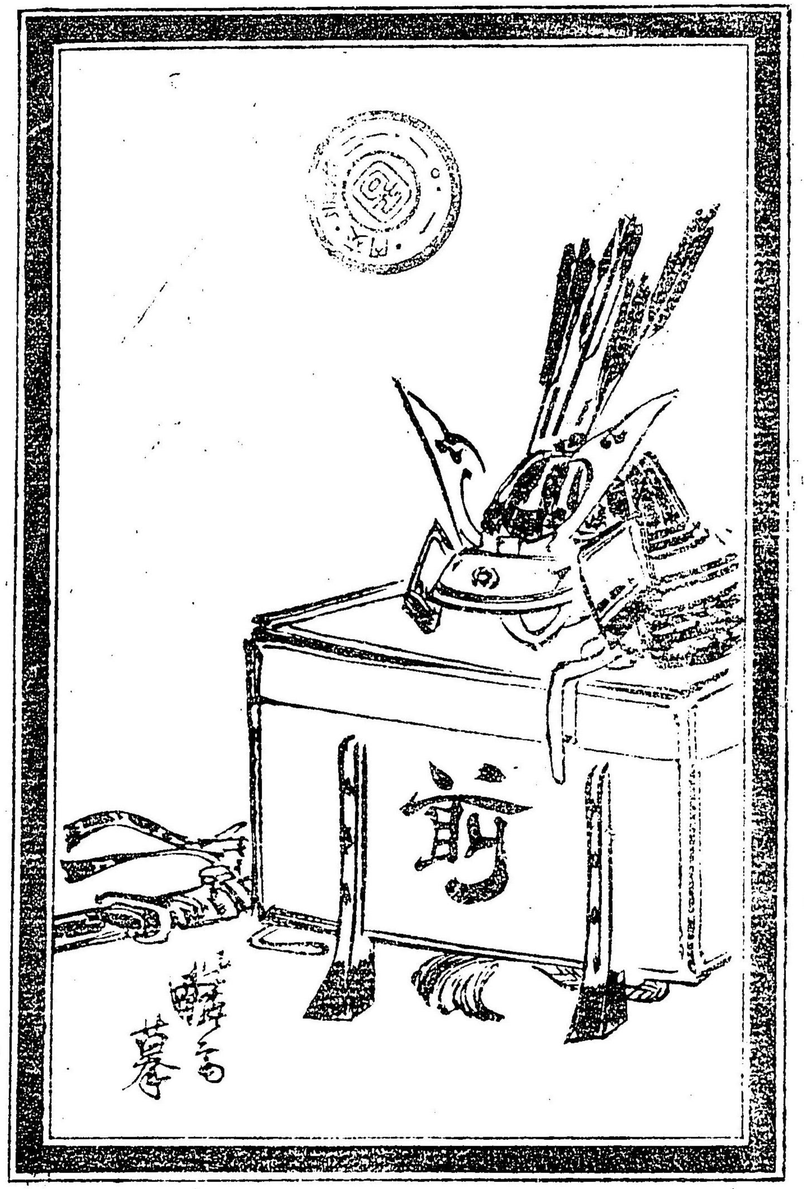
836
本錄
鼠小僧白浪草紙
全

東京印 TOKYO 1 W2/2211

文化年中ヨ鼠小僧と仇名せる盗賊あり夫が素性を尋るに元い佐々木家の浪人なりしが今い零落して日雇ゐとして送る紀伊國屋藤左エ門の子なり稚き時両親養ひ兼て或る大家の軒下に捨て父も用水桶の陰にて窃に様子を伺ひ居たりしに子い肌寒く來掛る人の耳に泣声入しゃい提灯さし付進み寄りヤレ愛らしき男子かなとて懐ろへ抱き入れ其場を立去りぬ此人い鼠吉兵衛と呼ぶ博奕打の親分ヨて何不自由ゐき身ゐれバ乳母を付實子の如く育てしヨ早辛蔵も十二歳ヨ至りしかバ博奕を見習子分共と一所ヨ押廻り金銀を湯水の如く蒔散し衆くの人に與へけるゐぞ鼠小僧と呼なせり今い廊通ひを始め金ヨ差支し故藏前辺の



東京 UNIVERSITY OF TOKYO
W2/2211

文化年中ゑ鼠小僧と仇名せる盗賊あり夫か素性を尋るに元い佐々木家の浪人かりしゞ今い零落して日雇ゐどして送る紀伊國屋藤左工門の子なり稚き時両親養ひ兼て或る大家の軒下に捨て父も用水桶の陰にて窃に様子を伺ひ居たりしに子ハ肌寒く來掛る人の耳に泣声入しゝい提灯さし付進み寄りヤレ愛らしき男子かなとて懐ろへ抱き入れ其場を立去りぬ此人ハ鼠吉兵衛と呼ぶ博奕打の親分ゑて何不自由ゐき身ゐれバ乳母を付實子の如く育てしゑ早辛藏も十二歳ゑ至りしかバ博奕を見習子分共と一所ゑ押廻り金銀を湯水の如く蒔散し衆くの人に與へけるゐぞ鼠小僧と呼なせり今ハ廊通ひを始め金ゑ差支し故藏前辺の図

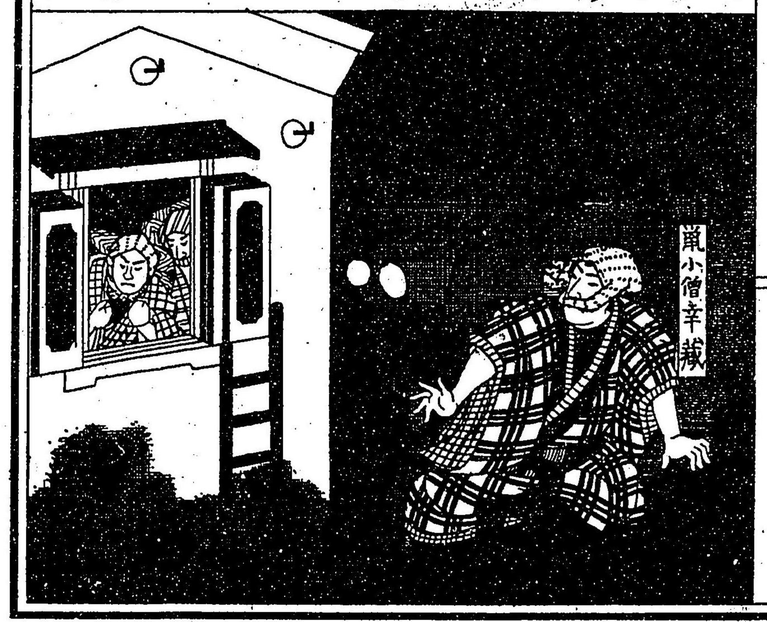
次郎吉

邪正者治
亂出本
賞罰者治
乱出昇

つゞき呉服店忍入り金九両と五六貫の銭を奪ひ取是ぞ盗の手始なり是より乗掛りし事かれが悪名なりとも名を残さんと今世上富人三分に貧人七分實に愍れの浮世あり我富人の金を奪つて一面に貧しき人に與へ安樂世界にして遣らん去れ共後楯なくてい成就せまじ今大坂に淀辰と呼ぶ博奕打手下四五十人もある親分と聞えければ是を頼んで望を遂んと大膽にも思立旅の用意をふし出立せり斯くと知らざる両親い嘸案じらるゝ事と伏拝〻〻早芝田町へぞ差かゝるに向ふの方より仇成中年増来りけるを一目見るより見惚て思ずず跡に付て行き近所まて様子聞くに信濃屋藤助の女房お松と云もの今亭主ハ上州へ反物寄

つき仕入より行き留守の事から密夫の事迄聞込甘く欺いて密夫より内濟金百両を取りも松に異見をして一夜の契を結びも松より十両餞別に貰ひて大坂への路用も出來獨喜び翌朝出立せり其日川嵜宿を行過る跡より若旦那〳〵と呼かくる者あり幸藏振り返り見れども覺へなき人故よき程に挨拶かし私しい伊勢へ抜参りするもの道連れにならんと云へも彼の男得たりと思ひ私しも名古屋まで参る者なれば御一所にも供願ひ升と此より同道して行程に早神奈川より着ければ此所より昼食せんと二人飯屋へ入りければ彼の男い宿の女ゟ馴々敷話しかどする様子如何ゟも怪しけれども幸藏い知らぬ体ゟてもお前の名ハ何と申すやと問へも私ハ清兵衛と申すがシテ其許の御名いと尋ぬるゟぞ幸藏と申す者と互に名乗合酒酌替して居たりしが私が眼で睨んだ所いもお前も只の鼠じやあるめへと云れて清兵エ意外に驚きお前の眼力少しも違わず何ゟを秘そふ私い此街道の胡摩の蠅だがお前が真逆ゟと云ふ口押へ幸藏声を低ふし然む力を合せて一働きやらかそふが何所ぞ大家い有らざるやと問へバ清兵エ打點頭三州岡嵜在の吉岡村に太郎左エ門といふ大百姓ありて四五万両の分限あれば其所ハ何ふだと語るを聞て幸藏大に喜び甘くいつたら山分と云〳〵又文吉と云清兵エの仲間と打合せて三人此所を立出て日數を経て岡嵜より四五里在の吉岡村に到り百姓太郎左エ門の家居を図

つゞき 見れバ田舍に稀ゐ搆へにて流石分限と知られたり三人ハ彼方此方を見て忍び込む手筈を極めて元の道へ戻り旅宿を取り其夜三人ゐて太郎左エ門の藏の窓の筋金二三本を引ぬきて内に入れバ千両箱うづ高く積上あるを幸藏ハ清兵エと丈吉ゐ二箱づゝ碇と背負せ已ハ三百両計取り分けて胴巻に碇と納め手早く元の窓より逃げ失せけるに両人ハ二箱を確と背負しと故窓より出るとて鉦ハず箱を下ろさんとすれ共細引にて確と縊し故急ゐハ解けず周章るうち村中擧つて集り來り竟に二人ハ生捕れたり此有様に驚き幸藏ハ危き其場を逃れ只管道を急ぎ日ならず大坂に着し大厦の旅店を見立此ゐ暫く逗留と定め宿の

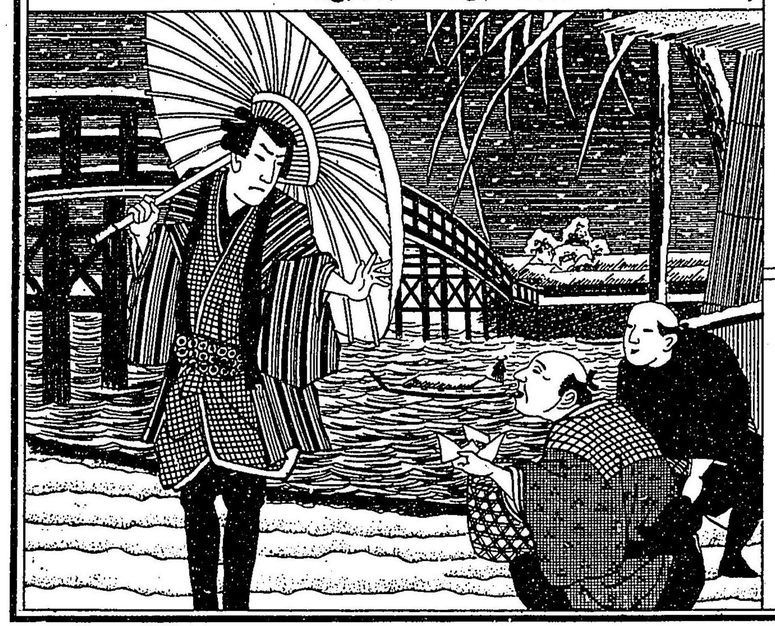


亭主に面會し小判一枚取出し酒肴を拵へけり亭主此を見てこハ如何に二三日前ゐ達し有りし吉岡村百性太郎左エ門が盗まれしトの字の極印付たる小判ゐれバ此奴ゞ逃た一人と心に合點き素知らぬ体ゐて二階を下り行けり斯くて酒肴出來た亭主を招き淀屋辰五郎方へ案内を頼とけれハ直ぐに受引其夕方亭主同道ゐて宿を出で道一里余り行くと小陰より大の男出たるに幸藏ギョッとせしゞ彼の男亭主に向ひ親分と声を掛け何ろさゝやき行去りぬ(幸藏ハ次郎吉と改称す)此時亭主ハ莞再と笑ひ定めしゐ前ハ驚ひたらうが實ハ私しゞ淀辰なり斯く明す上ハゐ前も包まゞ語られよと言れて次郎吉ハ吃驚しそんゐら貴君ゞ淀屋の親分と互に一伍一什を語り合親分子分の契約せり此時淀辰ハ種々の奇術を遣けるに次郎吉驚きあゞらも何卒此術を御傳授なし下されし一度女の肌を觸れバ命を失ふ故に外に與ふべき守りあり能く信心なさゞ身の軽くゐるを鼠の如く自由自在ゐり必肌身を放すゐと一の守を與へけれバ次郎吉ハ躍雀して打喜び禮を述て受收め二人連立宿所へ帰りける是より淀辰の片腕ゐる畳屋三右エ門ゐ近付とゐり其他子分の者に一々披露濟けれバ先手始に近在の百姓某ゐて三百両を奪ひ取りたり其後三右エ門と諸共親分の所ゐて一座の酒宴の時ゐ先の半次と云もの親分一寸聞て下さい四覺寺と言ふ山寺の和尚ハ大責僧 次へ

つゞき ふて生佛と云ふ諸人の信仰一方ならず多分の金を貯へしと聞けりナント一工夫あつてわと語るを聞き三人がそハ何よりの肴なりと其夜四人連立該寺へ忍び入り手向ふ和尚を殺害して家探しおせば案に違ずず多分の金銀仕合宜と奪ひ取り四人が順序に依て分與けるる扨次郎吉ハ爰ゑ三年を送りけるが古語ゑ所謂人の性ハ元善なりと宣おるゝるゑ不圖両親の身の上を思ひ出し急に江戸へ帰り度なり路金も多分に得たる事なれば発足あさんと淀辰及び三右エ門其他の子分ゑ至ろ迄事實を述て袖別を告ぐれば元來人望の在る次郎吉あれば一同名殘を惜みて引止むれども再會を期し大坂を発足し日を経て小田原驛に宿り

酒酌乍ら親への詫事如何へせんと思案の折隣り座敷の二人連顔ハ見へねど親仁と娘が物語此お峯手前の体も品川の囲戸ゑ話もして有からて遅鈍言ても贅おと夫より弥行積り不覺悟をして寝るが能いと声高に罵りしが頓て親仁の鼾のを扨ハ娘の身賣の強談可愛想にと思ひ〳〵小用ゑ行ば椽側ゑて彼の娘ゑ出合一伍一什を聞二十三十の金ハ何でも成るから親父へ縁切として私しが廿五両置て行程に今夜一所ゑ逃げて江戸へ行き夫婦ゑなる氣ハないと云れてお峯ハ生娘の発と赤らむ其顔を掩ふてハイト返事ハ仕兼ねれど心の中の嬉さを見て取る次郎吉耳ゑロ寄せ何うひそ〳〵囁きけり是より一通の書面と金子廿五両を親仁の枕元に差置き二人手を取り立去りたり是後江戸髙輪へ所帶を持ち夫婦睦じく暮し居けるが両親へ次郎吉家出の後心配して博奕も嚴き故田舎へ身を隱れし事共聞及び盗みの業を仕乍らも流石恩義ハ忘れずして氣の張弓も打折て矢の根も拔し心地おれがお峯を連て江戸の名所を見物させ已も心を慰めけり其年も暮て正月の初卯の日亀井戸へ参詣せんとお峯ゑ促せば雪催しゑや癪の起りし故留守居するとの事おるゑぞ去らば一人で出掛んと亀井戸へ参詣あし帰路ゑ鰻やゑて一杯引掛けお峯へ土産の皮包手に提乍ら酒の機嫌ゑ歩行ける早永代橋近く來りしゑ火燈し頃雪ハ漫々降り出すゑ物の具あければ搗詰の茣蓙張ゑ這入て辻駕來らば乗らんと

表を詠めて居たれ共日ハ暮果て往來あく犬さへも通らぬ折に搗を渡り來る小僧ハ素足よて蜆々と呼ぶ声も寒さよめげて震へつゝ雪踏分て來るよを次郎吉ハ嘆息し小僧〳〵と呼止れば蜆賣ハ雪明りに透し見て伯父さん一盤臺残つたから安く負けるから買て呉ねへゝ是を賣ねへと阿母の藥を買ふてゞ出來ねへから後生だからと云ふ詞ハ賤けれ共其愛想のなきゞ猶愛らしくて皆買つて遣ふゞ此大雪に兩具がないから今を買て來て呉んゝ使賃ハ沢山やるからと云ハ蜆賣ハ合點よそ金を渡して誂る頃て老人ゞ杖を力に小僧と共に來ゝ伯父さん是ハ釣だと錢と今を差出すに次郎吉ハ請取て彼ハ親仁さんゝハイ夫より親仁に



向ひ今聞ハ此子母親大病の由無そ困りと懐中はたいて八九両紙よ捻り是親仁さん蜆代と使賃ゞと渡せハ親仁ハ押戴き有難涙にむせびける又皮包の鰹と下駄とを与へ帰りける此親父ハ花沢七兵衛として諸侯の家臣なりしゞ故ありて浪人とおり夫婦永の病氣に娘の身賣等して漸く其日を送る其憐れ云ハん方なき事共おり扨次郎吉ハ懐中の追々乏しくなるよりしゞ翌日聞ハ彼酒店大困難よて閉店の様子なれゞ最氣の毒に思ひ其夜一通の書付を添へ彼百両を返しける是より次郎吉ハ商家ハ立派に見えても内証ハ悪しき者と思ひ諸大名のお手元金を奪ひける或時藤堂家へ忍び入りしに外の諸侯より も用心嚴しゝらず次郎吉得たりと御殿へ忍び行よ闇ハあやなき後より曲者待と呼び止られ次郎吉大いよ驚き身を忍ぶせ足音なく走り遁れて一息つく間もなく一人の武士エイト捕ゐる襟髪を振拂ひつゝ逃出すに何方ともなく八九人取〻〻と取巻れ身体今ハ谷りし時誰とハ知らず次郎吉ゞ我と共に來よと云ふかと思へハ忽ち二丈計りの高き所へ飛上り又突落され漸く夢のさめたる心地又奇あるかあと辛じて浅草辺に囲ひ置くお園といへる女め許へ走りけり漸く門辺に來りし頃ハ夜も明ぬるに軒下に一人の男立居るゆゑ不審に思ひ近寄り視るに次郎吉がお前ハ金藏ぢやァねへゝと云れて曲者仰天し次郎吉ゞ顔をしげ〳〵見て次郎親分ハ

つゞき　とんだ所で不思議の對面併し御無事でお目出度と是より料理店に上り淀辰始め三右エ門其他三四十皆お仕置の刑となりし事迚一伍一什金藏の語るを聞て次郎吉ハ嘆息し又お先の半次其他二三人見知人として江戸へ送られお前を詮議するとのことを道中でちらりと聞たから親分も江戸ハ浮雲から何所へか姿を隠しなせへと言はれて次郎吉打黙熟く深切に知せて呉たそんなら爰で別れるか隨分達者でと袖を別ちしがさて次郎吉ハ見知り人として半次ぅ來て居るとのことあれが昼間ハうろ〳〵歩行れず夫ゟ付お峯を始め囲つて置く女の始末を付やうと女の許へ行旅行のことを告け聞せ金子を與へて手當をかし其翌朝

両国橋へ來掛る後ろより旦那様〳〵と一人の若者ゞ声を掛るに次郎吉ハ見知らぬ者故見忘れましたと言を彼者ハ打笑ひながらお忘れなさるハ御尤私しハ未だ前髪の有し頃殊に日ハ暮雪明り永代橋で堺を賣とき貴君に多分の金子を頂き親仁と共に立帰し小僧で有り升と言れて次郎吉さてハと心付大層立派の男ゟ成たので忘れて仕舞たゞ親仁さんハ達者かへと言れて菊松悦ばしけゞ彼のお金で貧の病し藥より利目よく母の病氣も癒り其上ゟ姉の身分も定りて今ハ本所相生町で小間物の渡世を致し居りますゞ貴君のお噂しない日ハ有りません何卒家へお寄なされて親仁や母にお逢ひ下されましと云れて次郎吉悦しく夫ハマア結構併しお前ハ商人とハ見へないゞと云で菊松仰の通り子供の時より舩好み故舩頭ホ成まして姉ゞ世帯を持やうに成ました兎も角も何卒お出なすつて下さいと袖を取へて放さぬ故是非あく相生町へ到りけるに聞しに増る奇麗お店菊松ハいそ〳〵両親や姉ゟ斯く告るに夫ハ〳〵と親子悦び下へハ置ぬ二階の座敷へ誘引て敷毛氈も赤き心を顕せる正直一途の七兵エゞ妻と娘を引合しぬ斯る折しも酒肴所狭く迫打並べ一人の客に三四人代る〳〵さす盃七兵エハ嬉し氣に若旦那さま貴方のお陰さまにて病人も癒り姉のお雪ハ九善の御主人ゟ身受され斯ろ始末ハ親子共々皆貴方ゞ彼時の賜ものより取続き何ゟ譬んやうもなくお禮を申も泪ゞ先

立真に有難がりてぞ饗應しける次郎吉ハ頻ゑ酒酌替し分量過せし故暫く醉臥せしが咽の乾くに目を覺し見れバ日さへ傾きしゝバ打驚きて起上り暇乞して立出るに七兵工尚も引止るを強て暇を告けれバ生憎菊松ハ貴方がお休ミ中九善の大番頭がお寺參りに來られしに菊松を無理ゐ連あされ跡ハ年寄に女のミか送り申すともおらねバと頻りに名殘を惜ミあり次郎吉ハ火燈し頃大橋をよろめき行をヨイ兄貴久しぶりと脊中を叩れ誰うと見れバお先の半次どうして此地へ來たのだと口ゑハ云ど胸ゑ釘半次ハ猶もすり寄るを次郎吉ハ此犬めと半次が横面張飛す彼方に忍びし七八人上意〳〵と左右より打んとするを次郎吉ハ身を飜し飛鳥の如く一目さんゑ大橋の真中迄逃延しが合圖の有けん彼方よりも捕た〳〵と人數の次第に加ハり飛込だり橋の上ゑハ捕手の面々上意〳〵と罵れ共流石ゑ飛込む者もなく夫川上ゑ川下よと呼ハる声ぞ喧し次郎吉ハ猪牙船の中へ落けれバ船の客人船頭共ハ仰天す次郎吉ハ手を付て旦那樣無仰天なさいましたらうが私しハ只今人違ひで盗人と言れ余儀なく捕方に手向ひなし罪おくとも夫程の所置を受るが否さに苦し紛れに飛込ましたが思ひ掛なく貴君の船へ落込ました何卒御迷惑ゐがらお助けなされて下され度と實と虚とを打交て頼めハ客人ハ夫ハマア飛だでありました併し斯く此船へ飛込と云ふも縁のあるとで有らう決して心配なく御同船なさいませ私しハ永代から上りますがあの通りがやく〳〵と捕方衆が恥廻る樣子故彼所へハ船が着られぬ故お前ハ道順の能い所まで送らせませうと情も深き其詞ゑ次郎吉ハ打悦び何分宜しく願ひ升と云〳〵船頭ゑ飛だ厄介を掛けますが御礼ハ致し升らうと言に船頭ハ星明ゑ見て旦那じやアありませんうと云れて次郎吉菊松さんで有さか是ハ〳〵と計らずも再び逢し嬉しさに漸く安堵したりけり客人が菊や知と方へと云へバハイ知て居る所ういつも咄申す大雪の時の旦那であり升何卒不都合のない樣ゑ御恩報しのためゑお助け申上たしと云ふに番

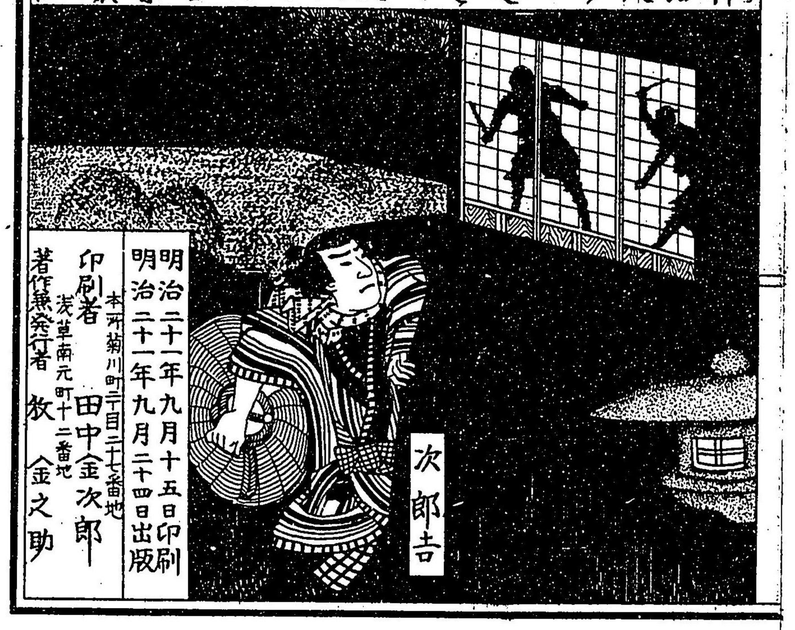
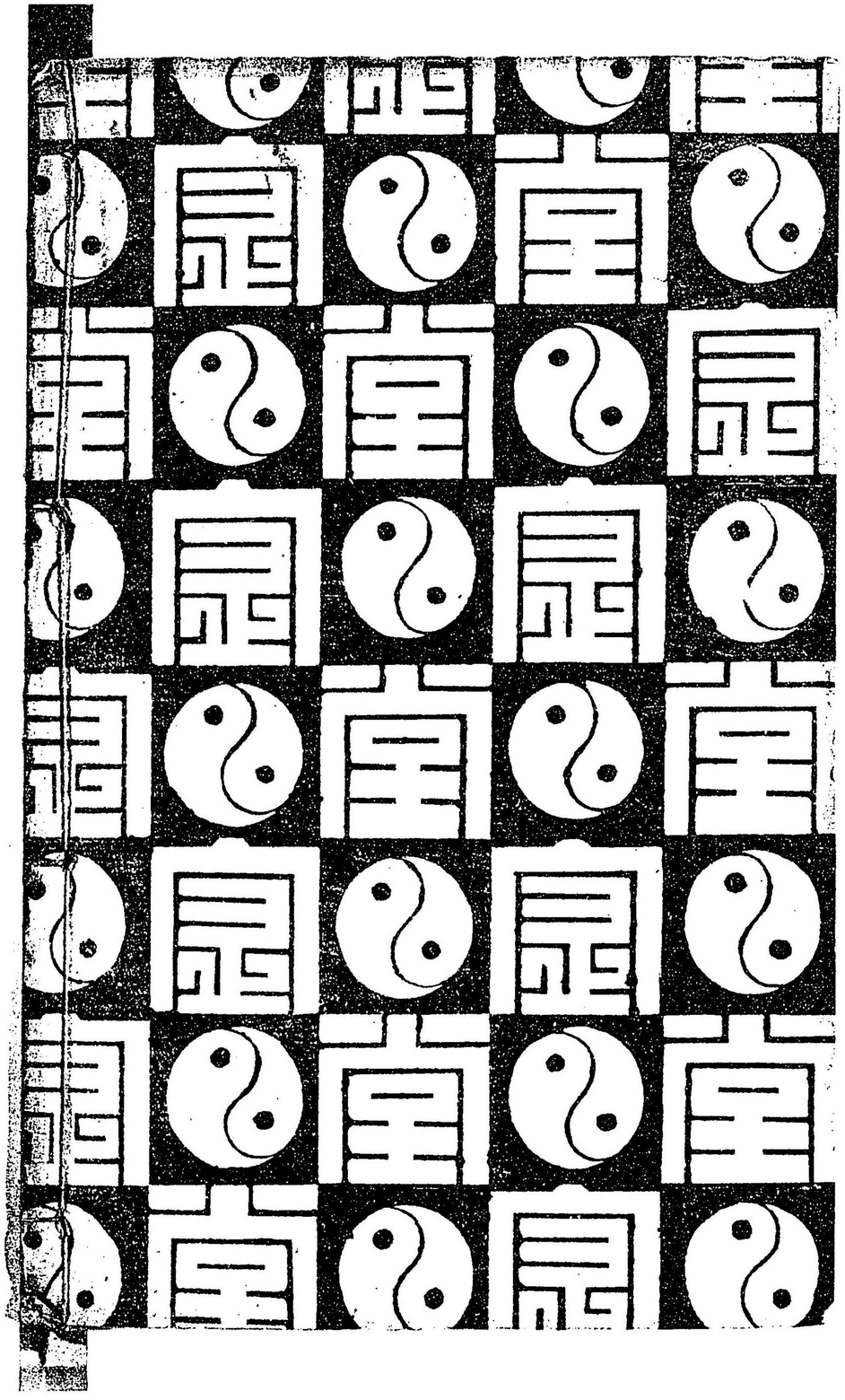
頭小膝を打不思議の御縁で御目に掛る私しハ小網町丸善の番頭藤左エ門と申者毎度菊松の親父ゞ御噂申て悦んで居り升と叮嚀の挨拶に次郎吉ハ猶も手を付て私しハ髙輪辺に住居します幸蔵と申者(次郎吉とハ名乗ゞ)今宵の危難を救ひ下つた有がさ実ゝ親と思ひます と云ハ藤左エ門はら〳〵と泪を流し扨ハお前さんも幸蔵と云なさるゝと云ふ間に髙橋へ着ければ次郎吉ハ厚く礼を述べ此所ゝて別れを告げ髙輪へこそ急ぎける斯くて其翌朝お峯ゝ向ひ漸く親の有家が知れさゞ千遠方故今より出立する程に悦んで呉と云ふにお峯ハ何所ですゝ京都ゞと云て夫々お峯ゝ手當金を渡し支度の最中門口ゝ御免なさいと

入來るハ彼菊松あり何様して居處ゞ知れましたハイ昨夜の番頭さんゞ少しも話う有から一寸來て下さる様ゝと此先の料理茶屋に待てゝ出ですゝら直ゝ一所に出下されと云ふゝ次郎吉ハ不審おゞら身支度して出行ぬ是ゞ互の別とハ後ゝぞ思ひ知られけん後ゝぞ思ひ知られける斯くて次郎吉ハ料理店ゝ到に待設けゝる藤左エ門是へ〳〵と差招き次郎吉昨夕の礼をのべ今朝又早く來れし仔細を問に藤左エ門ハ次郎吉の顔を詠め居さうしゞ潸然と涙を流し是幸蔵今更千万云迚も甲斐おきてとハ云おゞら已れハ〳〵憎い奴斯く云バ合點も行まいゞ已れハ實の親紀伊國屋藤左エ門と云者我等ゞ素性已を捨し昔語りを聞さんと其大畧を物語り已れゞ十四の秋女房ゞ亡りし丁度今年ゞ廿三回忌昨日ゞ祥月命日故寺参の戻り道計らず船ゝ飛込しを我子とハ知らざりしゞ已れゞ詞の跡先を怪しく思ひ菊松ゝ跡を付させ住所を見定め駕籠で飛せて今朝來りしも最早鼠小僧次郎吉と配付の廻りし體慥に我子と知る上ハ捨て置れぬ我ハ兎も角大思受し吉エ衛殿へ惡き耳をゞ聞せまじと迂濶〳〵して居る已れを遁さん為に來しゞりと懷中より百両を取出しサア是を路用に少しも早く身を忍び一日ゞりとも生延よと始めて明す真實の親藤左エ門ゞ物語に仰天し思ひ廻せバ勿体あく撞と伏臥し男泣其時藤左エ門ハ手前ゞ旅出の餞別ゝ逢する人ゞ有ぞとて唐紙サット引明る中ゝハ

吉兵衛夫婦倶ふ涙に暮居るよ次郎吉再び仰天して何と詞も無りける扨實父藤左エ門ハ女房の死後小網町九屋善四郎方へ飯焚人とふり律義一方よ勤めしに主人の目がねよ先代より支配人と仰がれ今ハ箱崎に住居て何不自由なくりけり又養父吉兵衛追々身代傾き一端在へ行しゝども又江戸業平辺ゝ住居せしを藤左エ門の情により親類同様に犯成され箱崎の同町にて萬事藤左エ門の世話よて安樂の身と成て何不足ハなけれ共最早六十の坂を越し一度幸藏に面會せんと明け暮神佛よ祈誓をかけ念ずる甲斐こそ顕れたり斯る所へ菊松ゝ走り來り藤左エ門よ向旦那の仰よ依り表の様子を伺ひしよ物騒しき人通

り聞バ今し方鼠小僧次郎吉と名乗品川のゝ役人衆へ自首した故諸人が聞て見に行くとのこと左すれバ諸方のゝ固めも緩むで せうと涙を含て菊松が若旦那一時も早くと促すよ次郎吉ハ打合黙實養の両親に百拜しゝ峯の始終の物語より我名を以て自訴人の真實のことあれバ行末この両人を宜く頼ひ奉ると涙と共に別れけり是より次郎吉ハ兼て上州高崎に忠五郎とて無二の友達ありて今でハ能き顔の親分と聞此處に到りて暫しの間身を隠せしが或時夢に實父養父母が獄よつあがれ我身の捕れん夫迄ハ赦されじとの事彼の菊松が知らせに來りし有様なるゞ忽ち夢ハさめよけるこハ正夢ゝ何やらんと心よかゝり早速江戸へ出立するに早大宮駅よ差ゝる折節二階から若々と呼止るに能々見れバ芝田町信濃屋の女房よて遊女よなりし事あれバ是非一泊と引止られ終に此家に上りたり此女以前の恨ゝを返さんと辛ひ主人ハ目明の親分なれバ尾よ尾を付大盗人の由告げしゝバ忽ち奥原九一郎此人養父吉兵衛の大恩人の子息なれが恩報じの為め)の手よかゝり江戸傳馬町へ送られける斬くて罪狀極まり冶郎吉が爪印口書も濟しに年來恩を受し人々助命願よ日毎に奉行所よ出る者引もきらず奉行も持余され助け度ハ思へ共御法ハ破り難く江戸中引廻しの上小塚原よて獄門の刑に所せらる其前日新入と て菊松が來るに次郎吉打驚き何して爰へと問ふ菊松が涙と共ふ替り果たる其図

つゞき お姿殊に翌日い御仕置とのを親御達が一言貴方へ云入度も自由はあらぬ其お身夫は付幸ひ船宿の間違よて一人い牢へ行ねばあらぬとに至り人は代つて参りました扨彼の後は御相談の上お峯さんに貴方の去状を渡して三島へ連て行と云れしは次郎吉さんの親御達と有ならば切て御宅の下女と思召お側へ置せ玉とれと去状を戻されしゝば不便は思しれ吉兵工様方に置れしゞ御四人への御孝行感心る事又貴方らお召捕と聞より黒髪を切り捨て〻菩提を吊いんと仰やつて居りましゝと云れて次郎吉お峯が貞節菊松が信義今更思ひ置てもしと覺悟を極め居りしと扨次郎吉の死骸を申受何某寺へ打寄て葬りしとぞ



明治二十一年九月十五日印刷
明治二十一年九月二十四日出版
本所菊川町二目二十七番地
印刷者 田中金次郎
浅草南元町十二番地
著作兼発行者 牧金之助